

平成二十七年大村町恵比寿六月燈
大村町子ども会

劇「女剣士」

《配役》

○師範	有川 朋甫	○門下生①	北原 空
○女剣士	大園優利奈	○門下生②	田原 隆登
○姫	田原 麻鈴	○門下生③	時吉 竜成
○瓦版屋	井手 愛翔	○門下生④	宮脇 圭佑
○親分	時吉 秀栄	○門下生⑤	寺園 生吹
○子分①	井手颯太郎	○司会	國生 千花
○子分②	海野 夢大	○特別出演	森重 隼汰
○子分③	亀園 凌岳	北原 由來	久保 一華
○子分④	亀園 斗慎		

《用意するもの》

○刀 ○竹刀 ○鉄砲 ○五条訓 ○道場の絵 ○屋敷の絵 ○瓦版 ○千両箱

《あらすじ》

平穏な生活が続いていた大村藩ではあったが、ある日、姫がならず者にさらわれた。その危機を乗り越えようと門下生が立ち上がるが、ならず者は鉄砲を持っており、簡単にはいかない。そこに、師範候補の女剣士が登場する。

《劇を始める前に》

千花 (幕間より、千花、一華、隼汰、由來の順で登場)
礼。(四人揃って礼をする)大村町子ども会の劇をする前に、来年から小学生になる三人に自己紹介をして貰います。

一華 (前に一歩進み出て、礼)
わたしは、久保フミのひ孫、久保正敏の孫、久保敏行の子、久保一華と申します。来年から一年生になります。どうぞよろしく願います。

隼汰 (前に一歩進み出て、礼)
ぼくは、大村町五班、森重公博の子、森重隼汰と申します。来年から一年生になります。どうぞよろしく願います。

由來 (礼をして、元の位置に戻る)
わたしは、大村町五班、北原光治の子、北原由來と申します。来年から一年生になります。どうぞよろしく願います。

千花
これから大村町子ども会の劇をします。今年も一生懸命稽古しました。一体どんな劇が展開されるでしょう。ご期待下さい。
礼。(四人は礼をして幕間から消える)

《第一幕》

(背景は道場の絵)

(門下生達が剣道の稽古をしている)

稽古止め！

空 整列！。(整列を見極めて)師範に、礼！

朋甫 我々の役目は、力を蓄え、大村藩の一大事に備えることである。

門下生 (声をそろえて)はい。心得ております。

朋甫 それでは、大村道場五条訓を申してみよ。

門下生 (声をそろえて)はい。かしこまりました。

(舞台前方に整列する。五条訓は匠平が掲げる)

空 ひとつ。心明鏡にして、諸行の実相を写し、心位正しきを得れば、即ち惑わされることなし。

隆登 ひとつ。気充溢して精気丹田に発し、気位正しきを得れば、即ち脅かされることなし。

竜成 ひとつ。態端正にして、心形一如なる態位正しきを得れば、即ち侮られることなし。

圭佑 ひとつ。行実践するに、倫理正道の行位正しきを得れば、即ち常道を誤ることなし。

生吹 ひとつ。技応変に轉移し、適応自在の技位正しきを得れば、即ち制されることなし。

朋甫 今申した五条訓、しかと心に留め置くように。

門下生 (声をそろえて)はい。かしこまりました。

朋甫 ここでお主等に引き合わせたい者がおる。優利奈、こちらへ。

優利奈 (下手から登場。師範に礼ををして、横に立つ)

私、大圍祐左右衛門が娘、優利奈と申します。以後、よろしくお願いいたします。

朋甫

おなごじゃが、なかなかの手練れじゃ。どうじゃ、手合わせしてみるか。

門下生

(声をそろえて)はい。よろしくお願いいたします。

(五人で誰が先に手合わせするか、下手付近で協議する)

生吹

相手はどうせおなごじゃ。どうだ、この中で一番弱い順に行くというのは。

圭佑

ならば、竜成、お主だ。この前一番弱かった。

竜成

何を言うか、あれは風邪気味だったからだ。

隆登

ならば、じゃんけんで決めようか。

朋甫

これ、何をもちもたしておる。五人で一斉にかかれ。

空

師範、お言葉ですが五人で一斉にかかれば、いかに手練れといえども優利奈殿には気の毒です。

朋甫

いいから五人で一斉にかかれ。いいか。気を抜くでないぞ。

門下生

(声をそろえて)はい。わかりました。

門下生

(舞台中央に、五対一でまみえる。五人は交互にフェイントをかけるが優利奈は動かない)

(五人が一斉に打ちかかろうとしたとき、優利奈クルリと体を回し、必殺座頭市切り。五人はバタバタと倒れる)

門下生

(五人はその場で「参りました」「参りました」と言う)

空

整列！

門下生

(初めの形に並ぶ)

朋甫

この優利奈は、師範代として召し抱えることにした。今後、しかと手ほどきを受けるように。今日の稽古はこれ迄じゃ。

空

師範と師範代に、礼！

門下生

(大きな声で)ありがとうございます。(幕)

《幕前①》

(この間に背景の絵を「屋敷」に代える)

門下生

(下手からズロズロ出てくる)

生吹

あの師範代、女だけどなかなか強いな。

隆 登 五人で束になってかかったのに、あつという間にやられた。

竜 成 あれは何という技なんだろうな。赤胴鈴之助の真空切りかな。

圭 佑 昔流行った、眠狂四郎の円月殺法かも知れないな。

空 我々も、あんな技が使えるように頑張ろうぜ。

(拳を突き上げ)おう！(舞台下手へ消える)

《幕前②》

朋甫・優利 (幕間から出てくる)

朋 甫 わしの師範の役目は、後ひと月じゃ。門下生のこと、しかと頼んだぞ。

優利奈 解りました。門下生ともども、命をかけて大村藩を守ります。

朋 甫 力強い限りじゃ。これで、わしもゆつくりと余生を過ごせる。

(幕間から消える)

《第二幕》

(背景は屋敷)

(斗慎、親分に酒を注ぐ)

秀 栄 お前達にひとこと言っておきたいことがある。

颯 太朗 親分、何でしょう。

秀 栄 大村藩に揺さぶりをかけて、しこたま稼いでやる。

夢 大 親分、どんな揺さぶりをかけるのですか。

秀 栄 姫をさらって、取り敢えず千両、身代金をせしめる。

凌 岳 千両ですか。千両あれば、遊んで暮らせる。

秀 栄 千両以上取れるかも知れぬ。お前等にも分け前はタツプリ弾む。

颯 太朗 でもお親分、姫の周りには、お付きの者がいるから、簡単にはいきませんぜ。

秀 栄 なーに。調べはついている。あの姫はお忍びで城を抜け出し、けまりをして遊ぶことがあるそうだ。

颯太郎

では、城の近くの空き地には張り込んで、さらってきましょうか。

秀栄

大事な金づるだ。手荒なまねしちやならねえぞ。

全員

わかりました。

秀栄

では、前祝いだ。お前達も飲め。

全員

はい、ありがとうございます。

(全員で酒盛りをする)

(幕)

《幕前③》

愛翔

(花道の下から、大きな声で)かわら版だ、かわら版だ。

(かわら版を客に配りながら舞台上上がる)

大変だ、大変だ。大村藩の姫がさらわれたぞ。詳しいことはここに書いてある。(と言いながら、舞台を降りてかわら版を配り、舞台下手に去る)

《幕前④》

朋甫

(朋甫、優利奈、門下生、舞台下手から出てくる)

一大事だ。姫が黒駒一家にさらわれた。

空

では、我々で救い出しましょう。

朋甫

待て。黒駒一家は身代金千両を要求している。

優利奈

このことが世間に知れることになれば、我が大村藩は面目丸つぶれです。

生吹

では一体、どうすればいいのですか。

朋甫

姫の御身の安全が第一じゃ。先ず黒駒一家の言い分を聞いて、千両出す。

隆登

では千両持参して、姫の釈放を求めます。

朋甫

恐らく、黒駒一家のことだ。簡単に釈放するとは思えない。

竜成

その時は、また出掛けます。

圭佑

大村藩の一大事を何とかするのが我々のつとめです。

朋甫

うむ。頼んだぞ。

門下生

解りました。

(全員、幕間から消える)

《第三幕》

(背景はそのまま)

(姫を縄で縛って、立たせておく)

麻鈴 私にこのようなことをして、お前達ただでは済みませんよ。

秀栄 これはこれは、元気なお姫様。あなたは大事な金づるだ。手荒なまねはしませんよ。しばらく我慢しておくんなさい。

空・隆登 (舞台下手から)頼もう。頼もう。

凌岳 黒駒一家に何か用か。

空・隆登 これこの通り。(千両箱を見せながら、進み出る)姫を頂きにきた。

夢大 (秀栄の所に行き)親分、千両箱抱えて大村藩の奴らがきましたぜ。

颯太朗 (颯太朗、二人の前に進み)ご苦労さんだったな。千両箱そこに置いてとつと帰れ。

空 話が違うではないか。姫を連れて帰る。(前に進もうとする)

颯太朗 (バキューン、バキューンと鉄砲で二人を撃つ)金づるを簡単に渡すわけにはいかん。おい、この金を片付けろ。

斗慎 はい。(重たそうに運ぶ)

(空と隆登は手や足を押さえながら隅に転がる)

(続いて、門下生三人がやってくる)

圭佑 (刀を抜いて進みながら)姫をお救いいたす。姫、ご無事ですか。

麻鈴 私は無事ですが、あの者達が鉄砲で撃たれました。

生吹 身代金を受け取っておきながら、卑怯ではないか。

秀栄 何が卑怯だ。これ以上近づくと姫の命はないぞ。(と姫に刀を近づける)刀を捨てろ、さもないと。(と姫にさらに刀を近づける)

(三人は刀を落とす)

(子分三人は門下生に当て身を喰らわし、それぞれ縛り、三人を手荒く転がす)

秀栄 (秀栄、五人に近づき)大村藩の剣術の門下生と言ってもこのざまだ。おい野郎ども。こいつ等の息の根を止めてやれ。

子分ども

はい親分。

(と、刀を抜いて五人に近づこうとしたところへ、優利奈登場)

優利奈

待ちなさい。

颯太郎

なんだいお前は、見たところ、女のようなだな。女の出る幕じゃねえ。

優利奈

大村藩の姫をかどわかし、千両に飽き足らず、さらにまた、尊い人命まで奪おうとする。この極悪非道、私は許さない。

秀栄

許さないだと？。おい、この鼻っ柱の強い女に、鉛の玉でも喰らわしてやれ。

颯太郎

へい。(じわじわと優利奈に迫る)

(優利奈、刀を抜いて顔をカバーする構えをする)

(バキューン)

(優利奈、一瞬身をひねって鉄砲の弾をかわし、颯太郎を斬る。刀を鞘に格好よく収めて、秀栄ににじり寄る)

秀栄

野郎ども、うろたえるな。この女を斬れ！

(秀栄、子分三人で斬りかかるが、座頭市切りで簡単にやつつける)

優利奈

(姫の縄をほどいて) 姫様、大丈夫ですか。

麻鈴

大丈夫。助けてくれてありがとうございます。

(このころは、朋甫を初め門下生も舞台に揃い、万歳三唱の体制を整える)

朋甫

優利奈、よくやった。これでわしも心置きなく、師範の座をお主に譲れる。

姫、これからお城を抜け出してはいけませぬぞ。

麻鈴

解りました。もうこりこりです。

空

それではここで、姫のご無事と大村藩の繁栄を祈念して、万歳を三唱します。会場の皆さんも一緒にお願いいたします。万歳、万歳、万歳。

(急いで幕)

*未就学児から順番に自己紹介をする。

《終わり》